

## ラテン・アメリカからのメッセージ

1976年から10年間、聖教新聞の特派員としてパナマに常駐した私は、北のメキシコから南端のチリまで、いわゆる「ラテン・アメリカ」と呼ばれる地域のほぼすべての国に足を踏み入れる機会に恵まれた。そしておとずれた国の街角やレストランなど、さまざまな場で異文化の衝突を体験してきた。

またパナマでは、家族が共に生活する中で、八百屋での買い物やPTA活動など、妻や子供たちを通して、現地の人々との交流の枠を更に広げることができた。その模様は聖教新聞の文化のページに1年余に渡って「ラテン・アメリカに暮らして」とのタイトルのもと連載された。同時にその内容の一部は、立場を変え、日本を中南米に紹介する形で、スペイン語でパナマの有力紙「ラ・エストレジャ・デ・パナマ」にも掲載された。

帰国後も、幾たびかこれらの地を訪れた。そこで、2005年の時点で、連載に手を加え、加筆したものをご紹介したい。

内容は、高尚な文明論や文化論ではなく、妻も子供もある一人の日本人の目に写った文化比較、現地の人々と肌を触れ合って実感した“生の国際体験”である。

(「ラテン・アメリカに暮らして」の連載記事のほぼ半分は、高校生向けの「国際理解」の教材として、別ページ「飛行機に乗ったドン・キホーテ」に紹介されていますので、そちらもご覧ください)

## レポート

### **パナマ日本人学校**

## 2月の炎天下で運動会

「お父さん、今度は絶対に来てネ」

「うん、今年はできる限り都合をつけるよ」

子供たちの祈るような目つきと願い。ずっと前からこの日を楽しみにしていたようだ。仕事あるいは出張で、父親として、ふだん学校の行事になかなか参加できなかった私は、この日をせめてもの償いと、万障を繰り合わせて出席することになった。

日本では、そろそろ卒業式の声も聞かれる2月の第2土曜日。ここパナマ日本人学校(エスクエラ・ハポネサ・デ・パナマ)で運動会が開催された。



開校まもなくの学校の玄関



狭い運動場ながら楽しいリレー

同校は、パナマに駐在する日本人の子弟を対象とした小・中学校で、日本政府の援助はあるものの「私立校」。各企業の寄付や生徒の授業料で運営されている。

設立は 1974 年。当初は全学年あわせて 30 人そこそこだった生徒数も、日系企業の進出共に年々増え、100 人を超えるまでになっていた。

小学校は 1 学年 10 人前後だが中学生ともなると「進学戦争」に突入するため、両親と離れ、本人のみ“内地”に帰国するケースが多く、在籍者は数人になってしまう。

一方、学校は、日本からの派遣教師を主体に、現地採用の講師や事務職員、スクールバス運転手、警備員等で約 20 人となる。

1981 年には池田 S G I 会長も同校を訪問し図書を贈呈、子供たちとも歓談している。そして、我が 3 人の子供のうち、上の 2 人が小学校（6 年と 4 年）に通学している。末の子は現地校（3 年）に通学中だが、この時期はちょうど夏期休暇中（1 月から 4 月初旬まで）に当たるため一緒に見物と応援に出かけた。

ところで、運動場といっても、一周 100 メートルのトラックが塀際ぎりぎりで見られる程度のもの。しかも 2 月といえば、パナマでは乾季の最中。1 月から全く雨が降っておらず、グラウンドには赤土がむきでている。

それでも、万国旗が爽やかに張り巡らされた校庭（運動場）では、ギラギラと南国の太陽が照りつける摂氏 30 度の炎天下、子供たちは喜びと若さにあふれて元気に飛び跳ねていた。

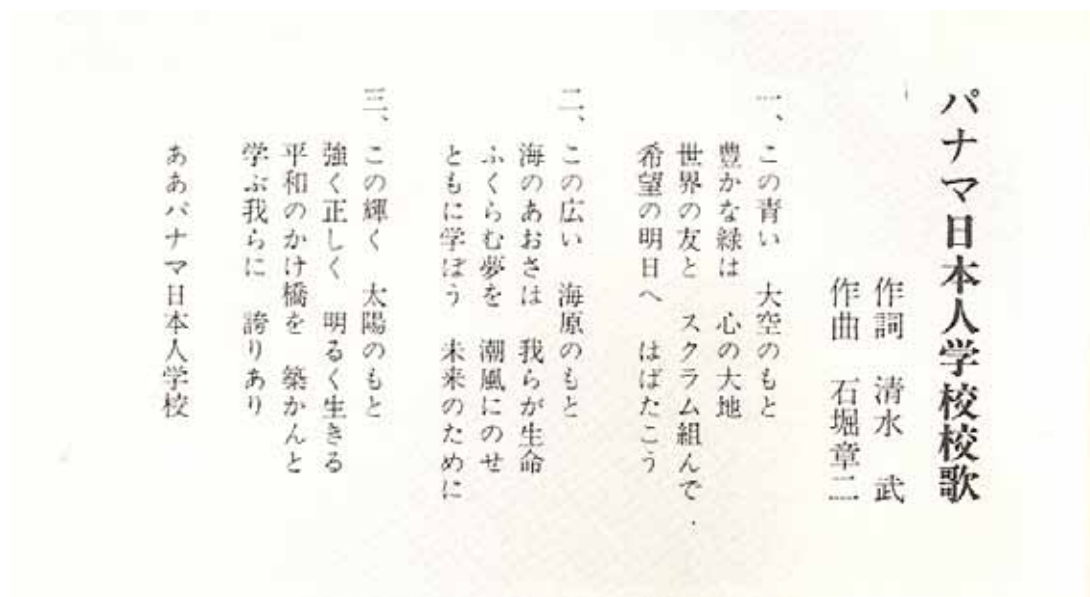
開会式では入場行進、開会宣言、優勝カップ返還、学校長あいさつ、来賓（パナマ在大使やパナマ日本人会会長など）祝辞、競技場の注意、ラジオ体操と続いた。そして競技の部では、むかでレース、玉入れ、綱引き、来賓スプーンレース、パン食い競争どれも、もう 30 年近くも昔のわが小学校時代のそれと、順序からして同じである。

一方、教師が少ないため、父兄の大部分や、就学児童をもたない駐在日本人も、役員として応援、また自らも競技に出場して運動会の盛り上げに当たっていた。子供また学校を軸とした親仲間のつながり　ここにも、パナマ日本人社会の一景が映りでている。

会場の周辺では、一般のパナマ市民も珍しそうに進行を眺めていた。というのも、ス

スポーツといえば、フットボール(サッカー)に代表されるパナマまた他のラテン・アメリカの諸国に、運動会のような学校行事は見当たらない。これこそ、いかにもニッポン的な伝統行事なのだ。

少々大げさに言えば、ここに日本人の血があり、日本の心がある。しかも“外地”に在住する日本人にとっては、日本的な雰囲気になれる数少ない機会の一つともいえるだろう。



閉会式で一緒に校歌《別掲、作詞：筆者》を歌いながら、日本の情緒と少年時代に対するノスタルジアに一瞬浸ったものだった。

余談ながら、わが2人の子供も、100メートル走で1等に入賞。小さな賞状を誇らしげに家に持ち帰ってきた。なるほど「絶対に見に来てネ」と何度も催促したはずだ。

(1983年記)

現在のパナマ日本人学校の様子をお知りになりたい方は、次のURLにアクセスなさってください。

<http://www.geocities.jp/heartland6570/>